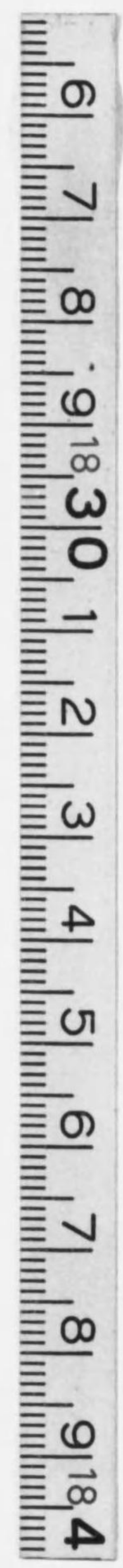


759

特 241

73

太祖教道志るべ

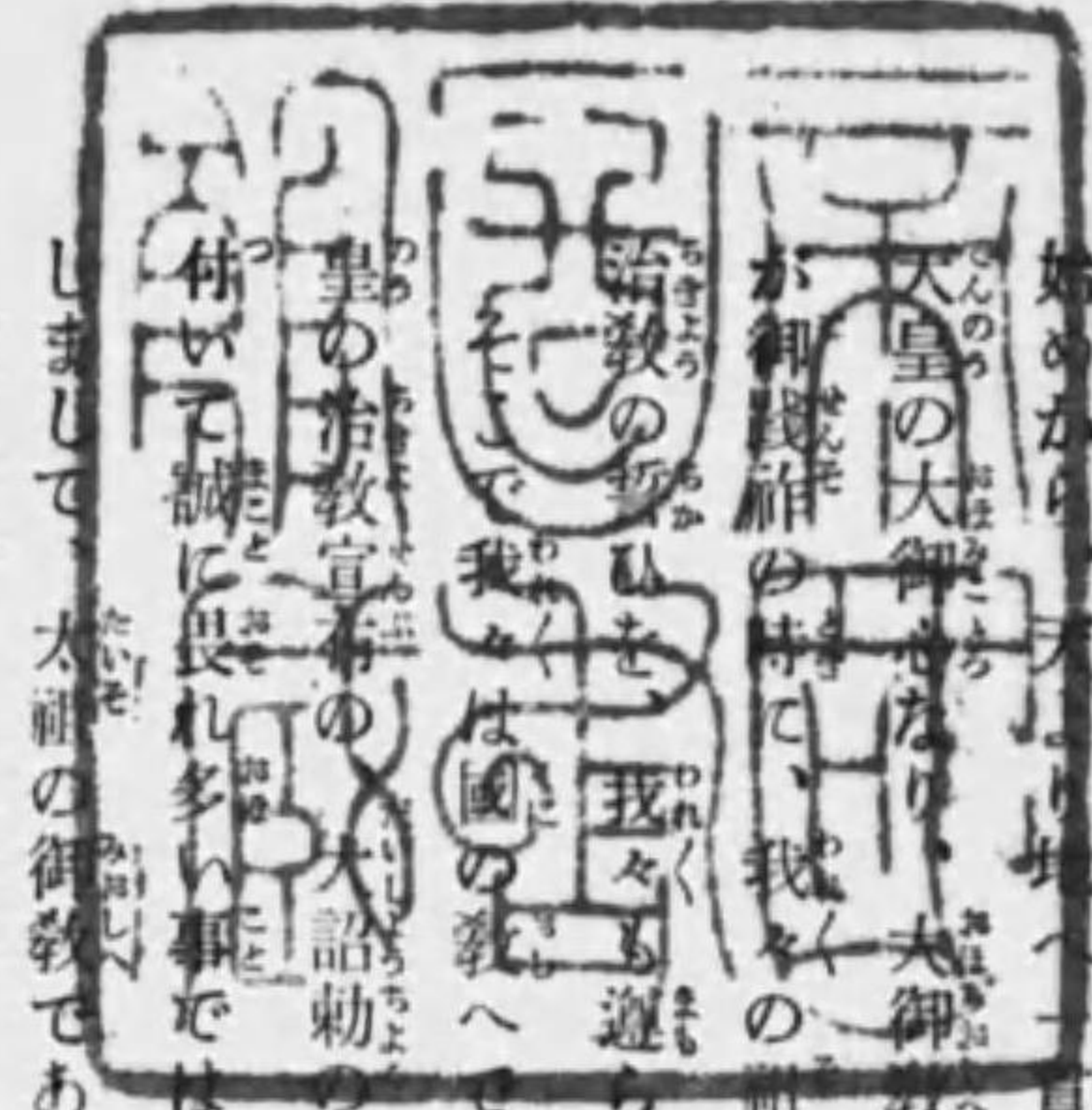


始



太祖教は宗教ではありません、我が國の肇造肇國の大精神を、鼓吹布傳するところの使命をもつて生れた、國民の自覺運動であります。

申すまでもなく我々は日本人であります、日本人であるからは、我が國の肇國、否天地開闢の始より、天の大神を奉じて來ましたところの大道、即ち惟神の眞實道を發揚して、皇祖神武天皇の大御教を奉じて、俱に俱に萬國無比の國體の尊嚴を守り、且つ神武天皇が御教の御誓ひにて、我々の祖先と共に、天神地神八百萬の神々様に、御誓ひ遊ばされました、平安



我々も遵らねばならぬと思ふのであります。聖の治教宣布の大詔勅の御心を奉じて、これを廣く弘通布傳したのであります、それに併せて誠に畏れ多い事ではあります、皇祖神武天皇を、太祖と申し上げますので、其御名を拜しまして、太祖の御教であるといふ意から、太祖教と名づけましたのであります。

明治天皇の神靈鎮祭の御詔勅を拜しますれば「朕、恭しく惟みるに、太祖業を創し、神明を崇敬し、蒼生を愛撫し、祭政一致する所、由來遠し矣、朕、寡弱を以て夙に聖緒を承け、日夜悚惕、或は天職の虧けんを懼れ、乃ち天神地祇、八神暨ね列皇の神靈を鎮祭し、神祇官を以て孝敬



を申す、庶幾くば億兆をして、矜式する所あらしめよ」と宣はせられて居らるゝのであります、これは神武天皇が紀元四年、鳥見の山中に靈時を立て、天祖天神を御祭りして、追遠申孝の道を行ひ給ひて、我等臣民に示されました、報本反始の御教に従ひ給ひたるもので、我々も其御聖旨を謹んで、奉じなければならぬと思ひます。

然るに我々の中世の祖先は、如何であつたかと申しますると、残念ながら色々な事情や、種々の事態で、色々な道や教へが出来たり、又傳來したり致しましたために、それを信仰して居りましたものも多くありました、それがために、明治天皇は治教宣布の詔勅を、御下しになつたのであります、その御詔勅を拜しますれば、天皇の御聖旨が能くわかるのであります、其御詔勅は、『朕、恭しく惟るに、天神天祖、極を立て統を垂れ、列皇相承けて之を繼ぎ之を述べ、祭政一致、億兆心を同じくし、治教上に明らけく風俗下に美はし、而して中世以降、時に汚隆あり、道に顯晦ありて、治教の不洽や之れ久し矣、今や天運循環、百度維れ新たに、治教を明らかに宣べ、惟神の大道を宣揚する也、因て新たに宣教師を命じ、以て天下に布教す、汝群臣衆庶、其れ斯の旨を體せよ』と煥發遊ばしましたので、一口に申しますれば、我國にはこんな立派な、結構な惟神の大道があるではないか、『朕はこの惟神の大道を奉じて、祭政一致の實をなすぞ、汝等

群臣衆庶も朕の旨を體せよ』と、我れ我れが何代も何代も、生れ代り立ち代り歩いて來た、結構な惟神の大道を、忘れて居てはならぬではないか、と國民に御教へ下されたのであります、然して上御皇室は元より、御皇族方々は全部、この治教平安の大道に據られてあらせられますのに、信教の自由は許すと仰せられましたのを幸にして、我々國民のみが勝手氣儘な事をして居ることとは、いかゞなものかと思ふのであります。

ではその惟神の大道とは、如何なるものかと申しますれば、此の神州日本に生を受けた我々國民が、極東大日本より赫々たる明光を、世界に照すところの、天地初發、肇造肇國の大精神に外ならないのであります。

申すまでもなく、天皇陛下は御祖先にまします、天地創造初發の一元神、天之御中主大神より幾億千萬年、萬世一系の御主で、皇祖天神の御直流の現身大神様であります、故に天皇は天の下の中心であり、天の下の大主宰者であり、また天の下の大家長で御座るのであります、而して我々國民も、また神別となり、皇別となりまして連々綿々、神の祖宗より生を受け繼いで、祖先より天皇に仕へて來た譯でありますから、我々と祖宗の神様との關係は、基督教で申します、エホバ、即ちヤーエーの神と、イズラエル人との間のやうに、一種の契約が成立して守護神となつて

やろう、其代りにイスラエル人も、亦ヤーエーの一神に奉仕する忠實な選民となつたといふやうな、譬へて申しますと、まるで養父と養子の間といふ様なものではなく、日本の神様は日本人を御生み下された處の神様でありますから、神様と我々とは切つても切れぬ、血縁を有つて居る間柄であります、でありますから日本の神様と我々國民との關係は、實父母と實子の間と變りがありませぬので、我々は正しい神の遠い子孫であるのであります、而して其我々國民が、天神の御直系の御神胤である現身大神たる、天皇陛下を中心に圍繞して、茲に天孫民族の實體を表現して來たのが、大日本帝國でありますから、そこに我れは日本人なり、といふ誇りがあるのであります。

もとより祖先は我々の原體であります、我々の肉體は一瞬にして亡びましても、御祖先の分靈は不滅のものであります、この不滅の靈魂が天地と共に續いて來ましたのでありますから、祖先は我なり我は祖先なり、所謂祖我一如は身即神で、我々も現身の小神であります、此の神の神裔たる我々群族の小神共が、天皇と申し奉る皇祖天神の御直系である、現身大神を中心に圍繞して、神集ふところの國でありますから、日本國を神國とか神州だといふのであります、その神國に出來た主義が、大惟神主義であつて、之れが肇造開發の大精神であります、而してこれが世

界の魂となつて居るのであります。

でありますから此の大精神が、世界の人類に涵養修得せられた時が、世界は眞の平和が出来るので、狭き國は廣く、峻國は平らかに、遠き國は仁慈の八十綱に引き寄せられて、森羅萬象在りと在らゆる物の、安心立命する所となるのでありますから、神州日本國は、世界の日本國であり世界は又日本の世界であつて、之れを統べ給ひ、之れを治め給ふのは、天の下の御主たる、天日繼の天皇の君臨し給ふことは絶體なものであります。

故に世界の人類は等しく、天皇の赤子であり四海同胞でありますから、一律に祖我一如ではありますけれど、我々天孫民族は御直系の、現身大神を戴いて居る、天皇の直屬である國民でありますから、先づ我々が自分は神裔であるから、我れも神であるのだ、といふことを自覺して神の道に従ふことが肝要である、と同時に此の大惟神精神に依りまして、世界の人類總てを自覺めさせて、世界の眞の平和と、眞の幸福に安心立命を與へねばならぬのであります、而してこれは我々神州民族の使命であると思ふのであります。

前にも述べました如く、太祖神武天皇は、鳥見の山中に靈時を立て給ひて、天祖天神を御祭り遊ばしまして、我々臣民に追遠申孝の道を、御教へ下されて居りますので、我々國民として自分

の祖先の、御祭りを致さぬものは無いのであります、然し自分の祖先の御祭りをすることも勿論大切ではありませんが、それと同時に我々は、御歴代の御皇靈を奉齋して、我々の祖先が受けて来ましたところの、御皇恩を朝夕拜謝せねばならないと思ふのであります。

畏れ多くも、現身大神たる天皇陛下は、靖國神社に御直拜を辱なふして居ります、此の御仁慈に對しましても、我々國民は春秋二季に行はせらるゝ皇靈祭を、唯宮中に行はせらるゝ御儀であるとのみ心得て、佛教で申す彼岸の中日として、お寺詣りをして唯自分の祖先の冥福を、祈つて居るばかりでは、神州民族とはいはれないかと思ひます、此の理由によりまして我が太祖教では、御歴代の御皇靈を奉齋して、朝に夕に御皇恩を拜謝して居りますが、猶各地に御歴代の御皇靈を奉齋する、神籬の建設を計畫して居りますから、完成の曉には、宗旨宗派を論ぜず國民舉つて、奉拜致したいと思ひます、が各家庭に於かれても、御皇靈の御分靈を御祭りして、朝夕に御皇恩を奉謝されんことを、御薦めするのであります、己れは何々宗であるから、別に御皇靈を御祭りしないでも、同じだといふやうな事も聞きました、然し日本に生れ、先祖代々日本に生を受け繼いだ我々は、近き自分の祖先を祭ると同時に、自分の大祖先であり、祖先がお仕へ申し上げ、且つ御守りを受けて來ました、御歴代の御皇靈を御祭りすることは、日本國民としての義務

であると思ふのであります、又自分の祖先を御祭らないでも、御皇靈を御祭りして居りますればこれが自分の祖先を祭ると同じことになるのであります。

基督教では人間を罪人であると宣告して居ります『世の罪を負ふ神の小羊を見よ』などと云つて、人間は總て罪人であるから、その罪を救ふて貰はなければ、神の御座近く待てることを宥されないと云つて居ります、又佛教でも『人間は罪惡深重の凡夫身であるから、彌陀の悲願に依らなければ、罪は救はれない』と云つて居りますし、自力宗でも『貪慾愚痴瞋恚の三毒を、具有した無明の人間であるから、これを解脱しなければ成佛出來ない』と云つて居ります、然し我々は神の神裔であり神であるのであります、なんで天父の愛や、彌陀の悲願に縋つて救つて貰はなければならぬのでせうか、我々は神裔である即ち神である、生きながらの神であることを自覺して即刻神の道を歩めば良いのであります。

希はくば我等神州に生を受けた天孫民族は、天神地祇の御守護を受けて、其導き給ふ儘に、誤つ事なく犯す事なく、心和やかに、一瞬の驕樂に惑ふことなく、意を正しくして罪科を拂ひ清め、常に大本源に恥じざる、嗜を忘れないで、實の兩親に縋るやうな氣持を以て、大神様に對しまして、朝には御護りを御願ひ申し上げ、夕べには御守りを拜謝して、我々は日本人である、

神裔である神であると自覺して、神の道を歩まねばならぬのであります、而して若しも諸々の不淨、諸々の犯し來つた罪科の汚れに育くまれたる、邪氣と妖氣に惱み悶へて、魔道に漾つて居るなれば、速かに本心を呼び覺まして、神の本體に立ち歸らねばなりません、凡そ子の可愛く無い親がありませうか、悪い子程可愛いと云ふ世の譬へもありません、實の親とも言ふべき慈愛深き大神様でありますから、吾々を御守護下さることや、御導き下さることは申すまでもなく、悪かつたことや誤つて居た行ひも、自分で悪かつたと氣が付いて改めれば、直ちに御許し下さるにちがいないのであります。

不滅の靈魂は不滅の働きをなして、我が延長を守り導くのであります、神の信の道も永遠不滅でありますから、天地を一貫する大惟神道を歩まねばならないのであります、儒教でさへも「天命これを性といふ、性に從ふこれを道といふ」と教へて居ります、道は天から來たもので、天とは即ち神のことでもあります。

然し大神様を祈るのに邪慾を祈つてはいけません、大神様に御願ひするのに惑を願つてはいけません、誠の人たる神の道を行ふことを願はねばならないのであります、人間は神を知つて居るか、神を知らないかに依つて、その人格が定まるのであります、心より願へよ、心より祈れよ、

一瞬の生命何をか惜しからん、一瞬の現在に正實なれば、過去も未來も正實であります、一瞬の逸樂に酔ふの愚を止めて、一瞬の現實に生きなければなりません、未來を願ふのには過去を省みないでも、刻々と流轉する現在に神の道を踏んで、忠實に最も正しく神たることを得るなれば、未來も過去も神であるのであります、そこで生死を超越することが出来るのである、然しそれは解つては居るけれど、神の道を行ふなぞと容易なことでないから、自分には逆も出来ないといふものがあるかも知れない、けれどもむづかしくて出来ないといふ死な、いで済むか、否必ず死は來るのであります、生きて居る以上死は早晚必ず來るのであります、その死を怖れない、死を悲しまない、即ち死の徹底は、我は神なりといふ自覺である、肉體は死んでも靈魂は永遠に神として生きる信仰は我が太祖教である、來りて大惟神主義を涵養せよ、心より悟れよ、心より信じよ、而して神として永遠に生きなければならぬ。

終

昭和十二年一月一日發行

大阪住吉區駒川町五丁目十三番地
發行兼編輯人 二 神 種 茂
印 刷 人 三 島 俊 雄
發行所 太 祖 精 神 發 揚 會